

## 私の略歴

### 小屋逸樹

1955年11月28日、川端康成の「古都」に登場する北山杉の里を北に入った京北地域で生まれる。周りは北山杉だらけで、当時は松茸や鮎も特産品であったが、そういうものには全く関心がなく過した。

両親が終戦後カトリックに改宗したため、カトリック教徒として洗礼を受ける。所属先は、金閣寺のそばにある「カトリック衣笠教会」。この教会は、「モルガンお雪」として知られた祇園の芸妓さんが、J.P. モーガンの甥ジョージと結婚し、京都に戻った晩年に、その遺産を寄付して建てられた教会である。まさに、祇園には足を向けて寝られない。後になって（40歳頃）、お雪さんが過ごしたお茶屋に入った瞬間、「ここがそうか」と感慨ひとしおであった。

田舎の中学を卒業後、永観堂と南禅寺の間にある東山高校に進学。学校は浄土宗総本山知恩院の系列で、毎月25日に行われた知恩院参拝では、カトリック教徒ながらパーリ語の合唱「ブッダン・サラナン・ガッチャーミ（私はブッダに帰依いたします）」に参加した。お父さんが「銭形平次」の万七親分役をしていた同級生がいて、よく銀閣寺の「名代おめん」に連れて行ってもらった。今や観光客に超人気のお店である。高校時代は、映画に夢中になった時期でもある。「地上より永遠に」の主演女優 Deborah Kerr にファンレターを出したら、何と返事が届いた。予期せぬ展開に気をよくし、その後も彼女の映画を観ては感想を送った。突然、マラガにバカンス中の彼女から絵葉書が送られてきたこともあり、私の宝物となっている。（他に、Lee Remick や Laura Antonelli からもサイン入りポートレートもらった。）

1976年、慶應義塾大学文学部に入学。当時は文学部の入試科目が英語と歴史だけで、浪人生活で疲れていた私でも受験できると思った。文学部の英米文

学科に進み、MITで博士号を取得して帰国されたばかりの西山佑司先生（言語文化研究所）の授業をすべて受講した。2年生の春に聞いた「恐れるべきは、授業のレベルではなく、あなたの怠慢です」という言葉は今も耳に残っている。意味論の議論が中心で、単純にみえることを複雑に理解する楽しさを味わった。英米文学科では、岩崎春雄先生の英語学ゼミに所属し、先生の温厚で寛容なご指導を受けた。

1980年、国際基督教大学（ICU）の大学院に進学。言語学を専攻するには、ICUか筑波か、という時代だった。三鷹の田園地帯にあり、渋谷や三田とあまりにも違うのでカルチャー・ショックを受けた。井上和子先生のご紹介で、国際短期大学で英語の非常勤講師も始めた。1クラス50人ぐらいの学生がいて、教室のドアを開けた瞬間、様々なパフュームの香りが漂ってくる大学であった。

1981年、英語以外にスペイン語をやろうとマドリッドに飛んだ。ヨーロッパのあちこちに友人ができたことが大きな収穫。レティーロ公園で、後に妻となるスイス人女性と知り合い、エル・エスコリアルやアランフェスを旅した。何とかスペイン語の試験にパスし、ICUに戻ってスペイン語の非常勤助手を勤める。指導教授の村木正武先生のご指導の下、意味の両義性、特定性、指示性に関する修士論文を書き、博士前期課程を修了。

1983年、スイスのバーゼル市に移住。ここでドイツ語を一から学び、バーゼル大学の博士課程に進学。スイスのドイツ語圏で、学校で学ぶドイツ語を話す人はほとんど外国人。地元の人々は標準ドイツ語とはかなり異なる方言をしゃべる。いわゆるダイグロシヤの社会。指導教授はイギリス・マンチェスター出身のProf. David John Allerton。先生は、英国式ユーモアがスイスでは通じないと嘆いておられ、意気投合した我々はよくランチに出かけ、研究からプライベートな話題まで、広範囲に語り合った。1990年、Allerton先生のご指導の下、*Subjecthood and Related Notions: A Contrastive Study of English, German and Japanese*と題する論文を書き終え、博士号を取得。

1987年から4年間、チューリッヒにあるSwiss Lifeに就職し、博士論文を書く傍ら、ペンションファンドの営業マンになる。ヨーロッパの主要国を飛び回

る仕事で、ミュンヘン支店やパリ支店では楽しい思い出がある。バーゼル大学の友人からは「文化の敵になった」と言われたが、大学以外に、ビジネスの世界に身を置けたのは貴重な体験であった。

ETH（スイス連邦工科大学）から日本語講師のオファーを受けるも、1991年、横山潤先生をはじめ諸先生方に推薦していただき、慶應義塾大学法学部の専任講師に就任。8年間暮らしたスイスを離れた。当時は、妻も日本に住む可能性があったが、最終的にスイスの生活を守る決断をした。結果、私は日本で単身赴任者となり、今まで家族に会うため、地球と月を4.5往復するほどスイスに飛んだ。国をまたいだ分離家族は、所得税を払う際に苦勞する。厳格なスイスの税務署が迫ってくるので、私は永住権を放棄し、遂に単なる旅行者となった。

慶應の法学部では、授業はもちろん、入試委員や人事委員などの学務に至るまで、すべて楽しく過ごさせてもらった。特に1回目の入試委員会では、学生さながらに時を謳歌し、厳しい業務の中（当時は各試験に面接があった）、皆でよく笑った。慶應の良さは、何よりも、その大らかさにあると思う。チューリッヒの三田会でも、慶應出身者はすぐに打ち解け、仲良く、そして助け合う。海外にいと、慶應を母校とするメリットがしみじみ実感できる。

学部および英語部会の先生方のお力添えをいただき、1995年に准教授、2002年に教授に昇任。以来、今日まで法学部のお世話になってきた。私のような軽い人間を受け入れて下さった法学部の先輩、また同僚の諸氏には感謝の言葉しかない。こうして岩谷十郎学部長・奥田暁代日吉主任の下で退職を迎え、幸せと同時に寂しさも感じている。皆さん、30年間どうもありがとうございました。そして、くれぐれも新型コロナにはお気をつけて。

2020年8月、京都にて。

## 研究業績

### 1 著書

- 翻訳『ロボットと人間—発展のピラミッド理論』（共訳），新潮社，1985年  
*Subjecthood and Related Notions: A Contrastive Study of English, German and Japanese*,  
 Birkhäuser Verlag, 1992年  
 『History of Europe 1945-90』（共編），第三書房，1996年  
 『名詞句の世界』（共著），ひつじ書房，2013年（第7章，第10章担当）

### 2 学術論文

- 「感情投影の「も」：その統語的・意味的特徴」慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』94号，1993年  
 「文法関係の規定をめぐる問題点」慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』95号，1994年  
 「コピュラ文の意味構造」慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』99号，1995年  
 「コピュラ文と修辭文」『Japanese Language Education in Europe』(2)，1997年  
 「The Two Quartos of *Hamlet*: A Linguistic Note on Their Textual Differences」慶應義塾大学藝文学会編『藝文研究』73号，1997年  
 「Description-based and Location-based Metaphors in the Semantics of Copular Sentences」慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』110号，1999年  
 「主語と主格補語の意味論（前）」慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』116号，2002年  
 「主語と主格補語の意味論（中）」慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』119号，2002年  
 「主語と主格補語の意味論（後）」慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』120号，2002年  
 「トートロジーと両義性」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』34号，2002年

- 「Prepositional Predicatives' in English」 *English Studies* 84, 2003 年
- 「もう一つのコピュラ文」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』35号, 2003年
- 「指示性と主語性」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』36号, 2005年
- 「無助詞コピュラ文：その発話行為的性格について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』38号, 2007年
- 「私, 困るんです。」—無助詞現象と発話のモード」慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』128号, 2008年
- 「無助詞文とは何か」『慶應の教養学』2008年
- 「モーツァルトのオペラ」と「オペラのモーツァルト」: 「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」の解釈をめぐる」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』41号, 2010年
- 「固有名とカキ料理構文」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』42号, 2011年
- 「名詞句の飽和性と見立て—非飽和化の諸相—」慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』134号, 2013年
- 「指定ウナギ文と「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』45号, 2014年
- 「NP<sub>1</sub> デアル NP<sub>2</sub>」をめぐる」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』47号, 2016年
- 「左縦書きと日本語の表記」慶應義塾大学法学研究会編『教養論叢』139号, 2018年
- 「形容詞的, 又は副詞的な意味を含む連体修飾「AのB」について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』50号, 2019年

### 3 その他

- 「外から見た日本語」(在チューリッヒ邦銀社長会での講演) 1996年
- 「Typologische Eigenschaften der japanischen Sprache (日本語の類型論的特徴)」(Linguistikkreis (於バーゼル大学)での講演) 1997年
- 「Syntaktische Gegensätze: Japanisch und Deutsch (日独語の統語的対比)」(バーゼル大学一般言語学科での授業(週1コマ, 半期)) 1997年
- 「コピュラ文と修辭文」(グラーツ大学での研究発表) 1997年

- 「一般言語学と日本語の統語的特徴」(スイス日本語教育セミナーでの講義)  
1998 年
- 「多言語社会とスイス」(『月刊言語』巻頭エッセイ) 2000 年
- 「世界の中の日本語 (4 回シリーズ)」(ラジオ短波「慶應義塾の時間」での講義) 2002 年
- 「Japan: Sprache und Gesellschaft (日本: 言語と社会)」(Wirtschaftsgymnasium Basel での講演) 2003 年
- 「飽和名詞の非飽和化について」(第 38 回慶應意味論・語用論研究会での研究発表) 2012 年
- 「日本語の文字表記はガラパゴス化の結果か」(慶應義塾大学通信教育部『三色旗』793 号エッセイ) 2014 年
- 「コピュラ文と「NP<sub>1</sub>のNP<sub>2</sub>」との関連について」(第 64 回慶應意味論・語用論研究会での研究発表) 2015 年
- 「《NP<sub>1</sub> デアル NP<sub>2</sub>》の解釈をめぐって」(第 78 回慶應意味論・語用論研究会での研究発表) 2016 年
- 「形容詞的, 又は副詞的な意味を含む連体修飾「A の B」について」(第 104 回慶應意味論・語用論研究会での研究発表) 2018 年
- 「英語の学び方」(慶應義塾大学通信教育部『三色旗』827 号エッセイ) 2019 年